

修士論文（要旨）
2009年1月

森有礼の“Simplified English”
— 近代日本言語政策と森有礼の英語観 —

指導 小池 一夫 教授

国際学研究科
言語教育専攻
20641402
大越孝一郎

目次

序論

森有礼の“Simplified English”	1
--------------------------	---

本論

1. 近世社会における話し言葉の状況(1)－兵農分離と話し言葉の身分差－	7
1.1. 近世社会における話し言葉の身分差	7
1.2. 兵農分離と身分制度の厳格化	9
1.3. 武士の官僚化と在地性の希薄化	11
1.4. 薩摩藩の領民支配	13
2. 近世社会における話し言葉の状況(2)－地域的閉鎖性と方言差－	17
2.1. 近世社会における人々の移動	17
2.2. 庶民による大規模な旅行	19
2.3. 都市化と人々の移動－初期近代イングランドとの比較－	21
2.4. 近世社会の地域的閉鎖性	28
2.5. 話し言葉における著しい方言差と多様性	32
3. 近世社会における書き言葉の状況－寺子屋と「分限教育論」－	42
3.1. 近世日本の識字率に関する内外の評価	42
3.2. 近世の教育観－「分限教育論」－	46
3.3. 寺子屋教育の実態と実際の識字率	52
3.4. 明治期の鹿児島における識字率	55
3.5. 日本語の表記と「国語国字問題」	56
4. 言語政策としての“Simplified English”	61
4.1. HallによるSEの解釈	61
4.2. Hall(1972)によるSE解釈の妥当性	64
4.3. 言文一致のローマ字表記	66

結論

近代日本言語政策と森有礼の“Simplified English”	73
-----------------------------------	----

注

参考文献

資料

謝辞

要旨

本研究は、タイトルに示したとおり、日本初の文部大臣となった森有礼が 1872 年に、当時の言語学の権威であった William D. Whitney に宛てた英文書簡で提案した言語政策案、“Simplified English”である。(以下 S.E. と省略する。) ただし、この言語政策案には特にタイトルが付されているわけではない。以下で議論を円滑に進めていくために、この書簡で提案された政策案の中で最も中心的な提案である“simplified English”から、森が提示した全ての提案を括るタイトルとして筆者が付けたものである。S.E. とは何かと一言で述べるならば、それは森が独自に考案・計画した、日本における「近代化」の進展を最大限に効率化するための言語政策であると言えよう。そして、その具体的政策として森が提示したのが、ローマ字による言文一致の日本語表記の確立と“simplified English”を漢文に代わる学術言語として用いることであった。その最大の目的は「近代化」の進展を最大限に効率化することであり、これは、明治初頭の知識人の多くに共通してみられた国防意識に起因していた。だが、より具体的な目的は、科学技術をはじめとした先進知識を英文書籍から効率的かつ経済的に吸収・配布することと、近代的なマス・エジュケーションである初等教育を通じて機能的非識字者を生み出さないようにすることにあつた。換言するならば、「習得が容易な日本語表記」を初等教育に導入することで機能的識字者の増大をはかり、「習得が容易な英語」を中等教育に導入することで、より多くの大衆に学術言語習得の機会をあたえ、ひいては日本の「近代化」を支える優秀な人材をより多く確保することにその目的があつた。

こうした計画を森が構想するに至った背景には、近世日本社会が内包し、明治に入ってから継承されていた大きな 3 つの問題があつた。第一に、近世社会における話し言葉に明確な身分差が存在していただけでなく、現代以上に多様な方言が存在していたうえに方言同士の違いも著しかった。しかも、この身分差と方言差は重層的な構造をなしており、異なる方言間のコミュニケーション上の大きな障壁となつていた。第二に、近世の民衆教育は「分限教育論」とよばれる教育観の下、社会的地位ごとに習得レベルと習得内容を規制された教育を受けるのが一般的であつた。近世社会では、身分や経済力の有無、性別などの社会的地位が、その学習内容を規定していたのである。こうした規定は、いわば上から下に押しつけられた物であつたが、2 世紀半もの間に次第に人々の中に内在化されていき、「学問」は「士人以上の事」とする考え方や、民衆のあいだにおける「学問」を忌避する傾向が一般化していたのである。このため、民衆の教育レベルと識字レベルも概して低かつた。第三に、日本の表記体系が複雑で習得が容易ではなく、その習得のためには長い時間と大きな労力とが必要とされた。このことは、「分限教育論」の存在とも相まって、民衆の大半を占めていた貧しい農業従事者による識字能力の習得を妨げていた。欧米列強による植民地化から日本の独立を守るために、可能な限り早急な「近代化」の達成は不可欠と考えていた森にとり、これらはその実現を妨げる大きな障壁と映っていたのである。

森は、これらの問題を解消するために「経済主義」という独自の合理主義的観点と、「折衷主義」という和魂洋才的観点から、S.E. の提案を行ったのであつた。従来の S.E. に関する研究の多くは森の意図を正確に把握する姿勢を欠いていた。本論は森の S.E. の具体的内容を、主に歴史的・社会的要因から明らかにするひとつの試みである。

主要参考文献

- 犬塚孝明. 1986. 『森有礼』 吉川弘文館.
- 井之口有一. 1982. 『明治以後の漢字政策』 日本学術振興会.
- 大石学編. 2006. 『近世藩政・藩校大事典』 吉川弘文館.
- 大石学. 2007. 『江戸の教育力—近代日本の知的基盤—』 東京学芸大学出版会.
- 大久保利謙(編). 1972a. 『森有礼全集』(第1巻)(近代日本教育資料叢書 人物編 1) 宣文堂書店.
- 大久保利謙(編). 1972b. 『森有礼全集』(第2巻)(近代日本教育資料叢書 人物編 1) 宣文堂書店.
- 大久保利謙(編). 1972c. 『森有礼全集』(第3巻)(近代日本教育資料叢書 人物編 1) 宣文堂書店.
- 木村力雄. 1986. 『異文化遍歴者森有礼』(異文化接触と日本の教育②) 福村出版.
- 小林敏宏. 2001. 「森有礼の『脱亜・入欧・超欧』言語思想の諸相—(1) 森有礼の『日本語対英語』論再考—」『成城文藝』第176号, pp.39-131.
- 小林敏宏. 2002. 「森有礼の『脱亜・入欧・超欧』言語思想の諸相—(2) 『英語採用論』言説の『誤読』の系譜—」『成城文藝』第177号, pp.35-77.
- 小林敏宏. 2005. 「森有礼の『簡易英語採用論』言説(1872-73)に与えた1860年代英国における『国語(英語)』論争の影響について」『成城文藝』第189号, pp.27-83.
- 国史大辞典編集委員会編. 1987. 『国史大辞典』(第1版 第8巻) 吉川弘文館.
- 国立国会図書館. 2007 「近代日本と国語」(第150回常設展示パンフレット).
- 佐藤喜代治(編). 1987. 『漢字と日本語』(漢字講座 第3巻) 明治書院.
- 千野栄一ほか. 1977. 『国語国字問題』(岩波講座日本語3) 岩波書店.
- 中村敬. 2000. 「船橋洋一、志賀直哉そして森有礼—西洋の大言語と皇国言語の狭間で—」『成城文藝』第170号, pp.1-32.
- 日本の英学100年編集部編. 1968. 『日本の英学100年』(明治編) 研究社出版.
- 橋本功. 2005. 『英語史入門』 慶応義塾大学出版株式会社.
- 林大ほか. 1977. 『文字と表記』(現代作文講座6) 明治書院.
- 前島密. 1997. 『前島密』(人間の記録21)(前島密自叙伝)日本図書センター
- 『現代用語の基礎知識2006』2006. 自由国民社.
- 八鍬友広. 1992. 「19世紀末の日本の識字率に関する一考察」『日本教育学会発表要旨集録』Vol.51, p.124.
- 八鍬友広. 2003. 「近世社会と識字」『教育学研究』Vol.70, No.4, pp.54-65.
- 安田敏朗. 2006. 『「国語」の近代史』(中公新書)1875 中央公論社.
- 屋名池誠. 2003. 『横書き登場』(岩波新書)863 岩波書店.
- 山口修. 1990. 『前島密』 吉川弘文館.
- 山口明穂ほか. 1997. 『日本語の歴史』 東京大学出版会.
- イ, ヨンスク. 1996. 『「国語」という思想』 岩波書店.
- ルビンジャー, リチャード著; 川村肇訳. 2008. 『日本人のリテラシー—1600-1900年—』 柏書房.